

いろいろな「図書館」に行ってみよう

日本大学図書館 経済学部分館長

小笠原祐子 教授

(社会学)

皆さんは、何枚の図書カードをお持ちですか？

私は、大学の図書館を使用できる教職員証に加えて、居住地の市立図書館のカードを1枚と近隣の地区センターの図書貸出カードを4枚持っています。市内には中央図書館に加えて17の地域図書館があります。1998年に図書館ホームページが開設され、インターネットによる蔵書検索サービスが開始され、さらに2005年にはインターネットでの予約サービスが始まり、市立図書館の使い勝手が格段によくなりました。かつて利用できる蔵書は、最寄りの図書館のものに実質的に限られていましたが、18館すべての蔵書をネットで予約して取り寄せることができるようになったからです。2019年度図書館資料統計によれば、最寄りの図書館の個人貸出用一般書は、105,482冊ですが、18館全体では3,083,903冊になります。実に30倍の冊数の蔵書を利用できるようになりました。

私の研究分野である社会科学の分野に限っても市全体で468,506冊あり、このうち9,592冊は外国語資料です。研究に資する本を市立図書館で見つけることも少なくありません。1枚のカードで6冊まで予約できるので、常時、6冊の本を予約しています。現在予約を入れている本のうちの1冊は、Kazuo Ishiguroのノーベル文学賞受賞第一作となる [Klara and the Sun](#) です。嬉しいことに、原著の英語の本も1冊だけですが、所蔵されていました。

社会科学系の本や英語で書かれた本は、予約を入れると、たいていの場合さほど待たずに入手できますが、人気作家の新刊となるとそうはいきません。例えば、2021年度上半期ベストセラー総合1位となった宇佐見りん著『[推し、燃ゆ](#)』は、市の図書館全館で47冊もの蔵書がありますが、2021年6月5日現在の予約数は1,008人です。1人の利用者が2週間借り出すと想定すると、実際に読めるまでに約10ヶ月も待たなければならない計算になります。そういうときに活躍するのが地区センターの図書コーナーです。地区センターに併設されている図書コーナーは、図書館に比べるとはるかに規模が小さく、比較的大きい2駅先にある地区センターの蔵書でも約28,000冊しかありません。図書館とは比べものにならない規模です。しかし利用者が近隣の人に限定されているので、人気のある新刊でも予約数はそれほど多くなく、ほとんどの場合、市立図書館より早く入手することができます。

さらに地区センターは、市立図書館の取り次ぎサービスもしてくれるので、とても便利です。私の場合、最寄りの市立図書館は2駅先にしかありませんが、一番近い地区センターは徒歩5分のところにあります。なぜ4つの地区センターの図書貸出カードを持っているのかと言えば、予算の限られたそれぞれの地区センターが購入する本が異なるからです。上記の『[推し、燃ゆ](#)』はむろんのこと、朝井リョウ著『[正欲](#)』や加藤シゲアキ著『[オルタナート](#)』は、地区センターに予約を入れました。各地区センターの月ごとの新着本をチェックするのが、私のちょっとした楽しみになっています。

コロナ感染症の拡大を受けて多くの授業がオンラインとなり、学生の皆さんが大学に来る機会が減っていることと思います。残念ながら必然的に経済学部学分館を利用する機会も減少傾向にあるでしょう。このようなときこそ、地域の図書館を利用してみるのもよいのではないのでしょうか。まだ持っていない方は、ぜひ、図書館カードをつくることから始めてみてください。

著者自己紹介

小笠原 祐子（おがさわら ゆうこ）

シカゴ大学大学院社会学研究科博士課程修了。Ph. D. (社会学)。専門は家族社会学，労働社会学，ジェンダー論。最近の主な論文に “[The Slow Decline of the Male-breadwinner Family Model in Contemporary Japan and Its Ramifications for Men’s Lives,](#)” (2020) *Japan Labor Issues* 4, no. 20: 15-28.